

西日本4地域における冬の暖のとり方に関する調査研究

正会員	○澤島智明*1	同	松原斎樹*2
同	藏澄美仁*3	同	合掌 顕*4
同	大和義昭*5	同	飛田国人*6
同	宮田 希*7	同	

暖房 住宅 行動
ライフスタイル アンケート調査

1. はじめに

断熱・気密性の低い日本の住宅では、居住者は冬期に部屋全体を暖房するのではなく、暖房器具の使用や様々な暖のとり方の工夫で寒さをしのいできた。このような昔ながらの冬の住まい方、暖のとり方には、省エネルギーが求められるこれからの住生活に応用できる部分が多くあると思われる。

本研究は、関西、九州、中国、東海地方を対象として、暖房の仕方や暖のとり方とその背後にある居住者の意識を地域差も含めて把握し、これらを生かした省エネルギー的な住まい方の可能性を検討することを目的とする。本報では、暖房や暖身に使用する様々な器具の保有率・使用率について報告する。

2. 調査概要

2.1 調査対象

調査対象は西日本の東海、近畿、中国、九州の各地から一地域選び、岐阜、京都、広島(呉)、佐賀の4地域とした。更に各地域、住戸の形態、年代の差などの違いを見るため、伝統的な形態の住宅が残る地区(以下、伝統)、新興住宅地(以下、新興)の2地区を選定した。なお地区の選定は、伝統は戦前から残る地区、新興は開発10年~30年を基本として選定した。対象住戸は戸建住宅を基本としたが、一部集合住宅が含まれている地区もある。

表1 調査対象地区詳細

地域	区分	所在地	開発・成立時期
岐阜	伝統	岐阜市金華	1525年
	新興	岐阜市大洞・芥見東	1965~1970年
京都	伝統	京都市左京区主税町	1932年
	新興	京田辺市山手束	1992年
広島(呉)	伝統	呉市倉橋町	不明(かなり古い)
	新興	呉市焼山	1970~1980年代以降
佐賀	伝統	佐賀市材木町・紺屋町	1608年
	新興	佐賀市木原、南佐賀	1966~1985年

表3 アンケート配布回収数

	配布数(部)	回収数(部)	回収率(%)	
岐阜	伝統	69	54	78.3
	新興	320	168	52.5
京都	伝統	190	115	60.5
	新興	470	231	49.1
広島(呉)	伝統	250	80	32.0
	新興	550	246	44.7
佐賀	伝統	235	99	42.1
	新興	465	232	49.9
全体	2549	1225	48.1	

表4 回答者、住戸属性(平均値)

地域	区分	回答者年齢	築年数	居住年数	敷地面積	延べ床面積	庭面積
岐阜	伝統	72.2才	40.5年	54.8年	224.3㎡	166.6㎡	88.9㎡
	新興	58.6才	26.9年	24.4年	240.1㎡	133.6㎡	52.0㎡
京都	伝統	60.8才	44.6年	37.4年	121.0㎡	138.4㎡	23.7㎡
	新興	53.7才	12.3年	11.4年	189.2㎡	138.1㎡	59.7㎡
広島(呉)	伝統	75.5才	34.7年	35.9年	286.6㎡	152.0㎡	58.1㎡
	新興	62.3才	28.1年	26.6年	220.7㎡	117.0㎡	67.4㎡
佐賀	伝統	60.6才	33.0年	35.6年	263.7㎡	138.9㎡	56.5㎡
	新興	62.4才	26.2年	25.9年	254.7㎡	110.3㎡	52.7㎡

A study on the residents' behavior to get warm during winter in the four region in western part of Japan

SAWASHIMA Tomoaki, MATSUBARA Naoki, KURAZUMI Yoshihito, GASSHO Akira, YAMATO Yoshiaki, TOBITA Kunihito, MIYATA Nozomi

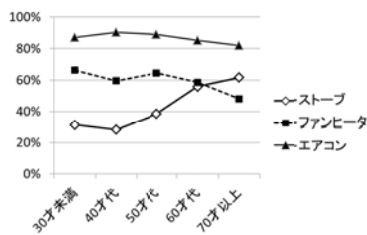


図1 主暖房器具の保有率 (年齢別)

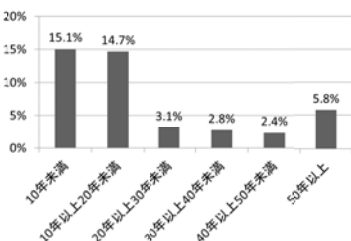


図2 床暖房の保有率 (築年数別)

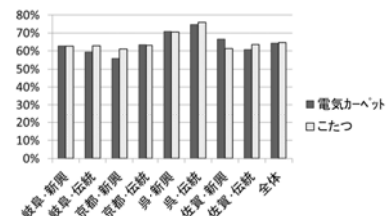


図3 採暖器具の使用率 (地域・地区別)

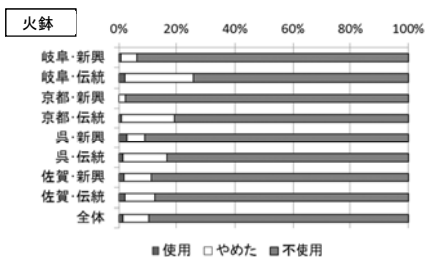
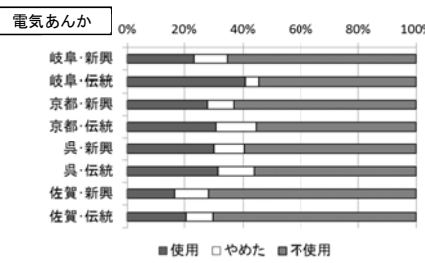
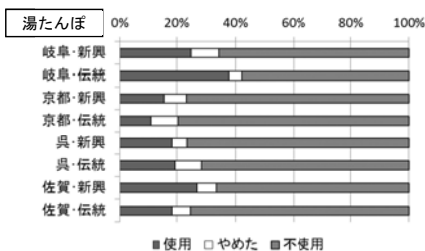


図4 暖房器具の使用率 (地域・地区別)

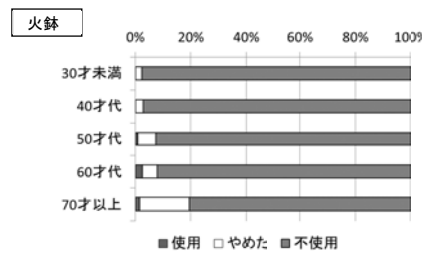
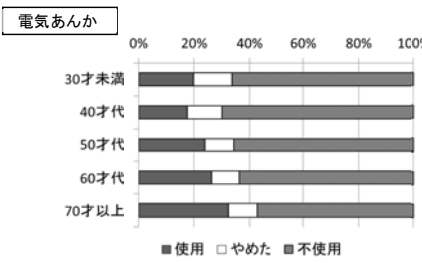
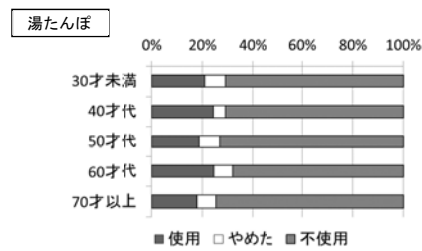


図5 暖房器具の使用率 (年齢別)

50年以上の住宅の保有率が若干高いのは改築を機会に床暖房を敷設する住戸があるためと推察される。

3.2 採暖・暖房器具の使用率

図3に電気カーペットとこたつの使用率を地域・地区別に示す。呉は伝統、新興ともに電気カーペットおよびこたつの使用率が高い。また、京都・新興の電気カーペットの使用率が低く呉・伝統と20ポイントの差がある。これは京都・新興の床暖房保有率の高さと関係していると思われる。また、電気カーペットとこたつの使用率はどの年代でも50%を超えており、年齢との明確な関係は見られない。

図4に湯たんぽ、電気あんか、火鉢の使用率を地域・地区別に示す。湯たんぽ、電気あんかは岐阜・伝統での使用率が最も高い。また、全地域で伝統での使用率が新興よりも高い。居住者の年齢によるものと思われる。湯たんぽは京都と佐賀で伝統よりも新興の使用率が高く、伝統/新興地区による明確な傾向は見られない。年齢別では電気あんかは回答者の年齢が高いほど使用率が高いが、湯たんぽの使用率には年齢差は見られない(図5)。湯たんぽは2007年の原油価格高騰を機にメディア等にも取り上げられるようになり年齢を問わずに使用されていると

推測される。火鉢の使用率は非常に低く1%強である。使用者の全数が16人で、そのうち60才代が8人で半数を占め、次いで70才以上が5人である。70才以上は「(使用を)やめた」割合が他の年代よりも目立って高い。70才以上になると火鉢の使用を止め、より扱いやすい採暖・暖房器具に移行したものと思われる。また、4地域全てで「(使用を)やめた」の回答率が伝統の方が新興よりも高い。居住者の年齢による差異と思われる。

4. おわりに

ほぼ全ての世帯が主暖房を保有する一方、こたつや電気カーペットの使用率もそれぞれ60%を超え、且つ湯たんぽや電気あんかも一定の割合で使用されており、様々な器具を組み合わせている様子が伺えた。また、多くの器具の保有・使用率に地域差や年齢差がみられた。

謝辞

アンケート調査に協力をいただいた各地の居住者の皆様、岐阜大学、京都府立大学、呉高専、佐賀大学の院生・学生の皆様に記して感謝します。なお、本研究の一部に、住宅総合研究財団研究助成金、および文部科学省科学研究費基盤研究B(No.21300270)の助成を受けた。

参考文献

- 1) 鈴木憲三ら：日本建築学会計画系論文集(475), 17-24, 1995.
- 2) 澤島智明ら：日本建築学会環境系論文集 74(637), 241-247, 2009.
- 3) 宮田希ら：日本生気象学会雑誌 49(1), pp.23-30, 2012.

*1 佐賀大学文化教育学部 准教授・博士 (学術)
 *2 京都府立大学大学院生命環境学部 教授・工博
 *3 椋山女学園大学生活科学部 教授・工博
 *4 岐阜大学地域科学部 准教授・工博
 *5 呉工業高等専門学校建築学科 准教授・博士 (学術)
 *6 大阪府立大学人文科学系 准教授・博士 (学術)
 *7 有限会社 地域にねがす設計舎 TAPROOT

Assoc. Prof., Faculty of Culture and Education, Saga University
 Prof., Dept. of Life and Environmental Science, Kyoto Pref. University
 Prof., Dept. of Life and Science, Sugiyama Jogakuen University
 Assoc. Prof., Dept. of Regional Science, Gifu University
 Assoc. Prof., Dept. of Architecture, Kure College of Technology
 Assoc. Prof., Dept. of Humanities, Osaka Pref. University
 TAPROOT Co.,Ltd.